

2026 年 8 月 6 日（日）第 565 回・源兵衛川での環境教育と地域活性化の取り組み

環境教育 × 地域活性化

源兵衛川：体験教育と観光回遊の統合戦略

NPO法人グラウンドワーク三島による実践報告と回遊性向上施策

自然体験を通じた「人間教育」の実践

現代の高校生にとって川は「怖い」以前に縁のない場所。「冷たい」「痛い」という強烈な感覚刺激が、未使用の神経系を動かし、新しい感性を芽吹かせます。

- 冷水刺激が前頭葉を活性化し、想像力と主体性を育む
- 伝統的漁法（ガサガサ）の体験による満足感と達成感

川遊び経験のある生徒

約20%

45名中10名程度

自然との断絶を埋める
体験学習の必要性

源兵衛川探検マップと回遊性向上

現状の課題
観光客の6割以上が
上流部で折り返し

解決策
全域1500mを繋ぐ
新看板・マップ設置

QRコード連携 多言語対応 動画ガイド

「生きた教科書」の物語

体験後の座学で「体感」と「歴史」を統合。風景が生態系の躍動に変わる。

観察対象の生物
ヨシノボリ、エビ類、カワムシ、トンボのヤゴ、ドジョウ、ホトケドジョウ

今後のアクションプラン

@ グラウンドワーク三島	@ 三島市	@ 学校・教育機関
QRコードリンク先の定期管理	公設トイレの環境改善と多言語化	体験学習プログラムの継続実施
回遊促進施策の効果測定	観光客の全域回遊支援（サイン計画）	生徒の達成感・自然観の変化を測定

NPO 法人グラウンドワーク三島による源兵衛川での高校生向けの総合学習（2026 年 8 月 6 日午前 10 時～12 時実施・45 名の生徒参加）と、回遊性の向上を狙った「源兵衛川探検マップ」および看板設置（2 箇所）の報告。

自然体験の希薄化に対する実践的環境教育の効果を具体的な事例で示し、QR コード連携や多言語対応で観光動線を川全体に拡張・誘導する戦略を提示している。

現代の子供たちと自然体験の断絶

講師（渡辺氏）は、源兵衛川「7 ゾーン」で、高校生約 45 名を対象に、環境体験学習を実施した。参加生徒は、三島周辺だけでなく、沼津・富士・富士宮市など広域的範囲から集まり、西部地区が約 3 割、東部地域が約 7 割を占めていた。

川遊び経験の有無を尋ねると、手を挙げたのは約 2 割（10 名程度）に留まる。多くの生徒にとって、川は「怖い」以前に、縁がなく、裸足で自然に触れる感覚や川に入る作法自体を認知・体験していない。

現代では、屋内生活の比重が高く、裸足で外や庭を歩く経験も一部の幼稚園の取り組みを除けば稀である。講師の世代にとって「川があれば飛び込む」ような自然への即応が当たり前だった時代とのギャップが浮き彫りとなり、体験を通じた体験型教育の必要性が強調された。

源兵衛川での体験学習とその教育的効果

体験の始めでは「サンダルに履き替える」あるいは「濡れてもよい靴のまま入る」ことを許可し、安全な浅瀬での入水を促した。

初めての生徒たちの第一声は「痛い」「冷たい」「寒い」と連続し、その後の生理的な反応で体が温まり「暑い」へと感覚が移ろう。

やがて、川の中を走り出し、水を掛け合い、網と足さばき（網を入れ、右足でガサガサと3回追い込む）を組み合わせた漁法で、実際に魚を捕獲するなど、行動が主体的に展開していく。

初体験の敷居を越えたことで、生徒たちは満足感と達成感に満ち、上がってきた際の表情は生き生きとしていた。

渡辺は、源兵衛川での川遊びは、単なる「綺麗な川で安心して遊べる」以上に、未使用の神経系を動かす「完全な人間教育」であり、強烈な感覚の刺激作用が新しい感性を芽吹かせると捉えている。

源兵衛川の冷たさは、初体験の若者に強い衝撃を与え、記憶に深く刻まれる体験となる。

生きた教科書としての源兵衛川の歴史と物語

体験後は、写真を用いた約30分に及ぶ渡辺による座学を行い、源兵衛川の歴史や生態系を物語として解説した。

生徒が、体で感じた「川に入った事実」「魚がいる現実」と「かつて魚がいなくなった歴史」を統合し、源兵衛川が、三島の歴史と文化に根差した「生きた教科書」であることを理解させる構成である。

解説は、ヨシノボリ（ヨシを登る＝吸盤の話）、エビ類、カワムシ類、トンボのヤゴ、ドジョウ、ホトケドジョウといった具体的な生物に及ぶ。

写真と語りによって、普段は「見えない」生物が生きている源兵衛川の輪郭として立ち上がり、単なる風景が生態系の躍動に変わって認識される。

生徒たちは座るよう促されても夢中で聞き入り、ヒゲの比較に象徴される細部の違いにも強い関心を示した。

渡辺はこの場を通じて「三島の子を三島の子らしく」育てること、地域理解を深めることを「教育の核」と位置づける。

「源兵衛川探検マップ」看板の設置と観光客への告知

地域の回遊性を高める施策として「源兵衛川探検マップ」を制作し、源兵衛川入り口と三石神社に看板を設置した。

マップは漫画「源兵衛川物語」を導入部とし、源流の楽寿園から中郷温水池までの約 1500m の歩行ルートを要点でガイドしている。

三石神社、眼鏡橋、ホテルの生息地、ホトケドジョウ、三島梅花藻、逆さ富士の絶景などのビューポイントを記載し、駅（広小路駅）など交通との連携も視認性高く示す。

看板には QR コードを添付し、グラウンドワーク三島のホームページ、源兵衛川の動画（ショート版・12 分版）、英語版のコンテンツに誘導する。

実地設置は 10 時から 16 時にわたり、狭隘部の掘削・整備を伴う大変な作業だった。事務所周辺では市のトイレ環境に不安を感じた外国人からの問い合わせが多く、地図や経路案内のニーズが顕在化していたことも背景にある。

観光動線調査では、多くの来訪者が、源兵衛川入り口から三石神社で折り返し、川の上流側 3 分の 1 程度しか体験していない現状が把握されている。

年間の観光客入り込み数は約 300 万人で、祭礼期や初詣での増減はあるが、源兵衛川全体の魅力がまだまだ十分には伝わっていない。新マップと看板の狙いは、迷いを防ぎつつ、上流部から下流部までの回遊性を促進し、滞在価値を高めることにある。

自然体験と脳機能（前頭葉）の関係性

渡辺は、幼少期からの自然体験、とりわけ冷たい水による刺激が前頭葉を活性化し、想像力・主体性・人格形成を補強するという見解を紹介する。

冷たさが繰り返し与えられることで、脳内の弱い電気信号（パルス）が通る際の「目詰まり」が解消され、発想力が生まれやすくなる。

子供時代に培われた冷水体験の記憶は、潜在的に頭の中に保持されており、成人後に再び自然に触れることで蘇る。

これは単なるレジャーではなく、知的探究や他者への共感（優しさ）を支える基盤である。緑と水への親しみは、相手の身になって考える力-生物やバクテリアの気持ちを想像するような研究姿勢-にも通じる。

未知の現象（例：ホタルの発生タイミングと累積温度の関係）を解き明かす際、想像力と共感力は密接に結びついており、自然がもたらす感覚刺激が長期的な能力開発に寄与する可能性が示唆される。

観光動向・賑わいの観察

看板設置当日（約 6 時間）には多数の来訪者があり、現場には泳ぐ人や犬連れの来訪者も見られた。

賑わいの様子は印刷物の写真でも確認され、現地が季節性（夏）と水辺アクティビティによって高い吸引力を持つことが示される。

こうした現地の「生きた賑わい」は、回遊性の向上策の有効性を裏付けており、体験価値と情報提供の整備が相乗的に地域の魅力を高めることを示している。